

## 「自然・環境」「文化」「新たな公」に関する提言

株式会社西日本新聞社 特別顧問 玉川 孝道

### 計画の理念と基本的視点

今回の国土形成計画作成に当たって最大の特徴は、広域ブロック的視野（九州圏広域地方計画）の重視である。同計画は、これまでの開発志向から、資源の保全、活用を中心軸にすえている。しかも、九州圏での全国に先行する人口減、高齢化、衰退の道をたどる農・水産業など地域構造が大きな転換点にあつての計画作りであり、課題は多い。「新しい九州像」を描くにあたって、特に、温暖で豊かだが、自然災害に見舞われることの多い「自然・環境」、文明のクロスロードとしての「交流文化」、さらに先導的な地域おこしに見られる「新しい公・住民パワー」の3つの視点が、理念、基本戦略に盛り込まれることによって、独自性と個性を持った九州圏広域地方計画としたい。

### 美しく豊かな自然、だが脆弱な九州圏土

九州の気候、風土の多様性は、生活のあり方、スタイルの多様性、地域文化の豊かさを生み出している。九州人が山、川、海、島などそれぞれの「自然条件」に適合した生活様式を持ち、農業、漁業、林業などそれぞれ自然と温暖な気候がもたらす自然生態的な資源を総合的に活用し、「海業」「山業」と呼ぶにふさわしい「生業」で生きてきたためである。そうした地理的、自然的諸条件を踏まえて、九州を俯瞰する視点が重要になる。醸成されてきた九州への愛着、誇り、さらに精神風土を考えると、それを育んだ、その土地の自然、気候など「環境的特性」を、まず考える。

九州の複雑な地形、離島、半島、火山群と温泉、四面海に囲まれていることなどによって形成された「美しい九州」は最大の財産である。世界遺産となっている屋久島をはじめ、数多くの国立公園、国定公園、阿蘇、雲仙、桜島などの火山帯が織り成す景観と自然は何よりも貴重な「九州の財産」である。「世界的財産」といっても過言ではない。これら NATIONAL PARK をどのように保全し、活用するのか。観光産業は勿論、温泉と温暖な気候を利用した[癒し・健康] ヒールランドとして活用できる天与の資源である。

風土、景観の形成。照葉樹林、亜熱帯気候などに生かされる動植物。それらをどのように守り、維持、保全するか。未来につなぐ九州国土の形成を特性あるものとして自然環境をまず、基本的に意識することが必要である。

九州島の地形的特性、活発な活動を続ける火山群、モンスーン気候、時に災害を呼ぶ台風、集中豪雨などが頻発する気候的特性、それらに最初に遭遇するのが九州であり、加えて離島、半島を多く抱えた九州は、極めて脆弱な国土である。雲仙、阿蘇、桜島など火山災害も多く、被害は甚大である。何処よりも、この圏域は自然現象に対処する「安全、安心」が重視、強化されなければならない。将来、地球温暖化が進み、気温、水面の上昇が憂慮されるが、都市部をも襲い始めた洪水、天草などに見られた高潮被害などの頻度は高まると考えるべきであろう。

## 幾つかの提案

1. 地球温暖化によると思われる異常気象による災害は九州を毎年、襲い続けている。火山噴火と火砕流、台風、集中豪雨による土石流、河川の氾濫、さらには活断層、火山活動による地震、津波など九州を襲う自然災害へのハード、ソフト対策による災害防止のマネジメントは、九州にとっての欠かせない社会資本であろう。自然環境の保全、防災、減災など危機管理システムが必要である。
2. しかし、中山間地は高齢化、人口減の波にあらわれ、森林管理は次第に厳しさを増している。長期間続く木材価格の低落は、林業を逼塞させ、再造林放棄など森林破壊を放置させる結果となっている。特に九州は人工林の割合が高く、造林放棄の影響は深刻さを増している。業界支援のみならず九州共有財産である森林、緑、自然を守るための環境税をブロック圏の共通財源とする。ただ、九州の全ての森林を守ることは現実的ではなかろう。人間が守るところと、自然回復力に任せざるを得ないところの選択もまた、ブロック計画のなかで検討すべきではないか。
3. 今年春、九州は時ならぬ光化学スモッグに衝撃を受けた。大陸から偏西風によって飛来する、黄砂とともに工場排出の大気汚染物質が原因と思われる。酸性雨なども国境を越えて、自然を破壊する。東アジアとの経済圏形成(黄海経済圏など)が九州の大きな課題となっているが、国境を越えた公害防止協働作戦の樹立を急ぐべきであろう。
4. 大量ごみの漂着による海洋汚染も、大量消費社会が東アジアに国境を越えて出現した結果であり、北九州などが蓄積している公害防止技術の協力、水俣病など九州が経験した痛恨の公害病の教訓をアジア共通の教訓とすることが必要である。
5. 有明海、不知火海プロジェクト  
有明海は広大な干潟、干満の大きさ、ムツゴロウに代表される希少生物、魚介類、植物では昭和天皇が気にかけていたシチメンソウほか内海、干潟特有の生物の保護などが大きな課題となっている。同時に海苔の不作など海の汚染防止策が急がれている。

## 2000年にわたる交流文化 文明のクロスロード九州

個性的な九州像を描くに当たって、それら九州の自然、風土等が培ってきた九州特有の文化、さらに、稲作文化をはじめ遣唐使船などによる大陸からの渡来文化に日本・九州的な個性を加えて蓄積、昇華した文化は九州地域のアイデンティティの基盤となっている。

魏志倭人伝に記載された邪馬台国をはじめ奴国などの九州の弥生の国々は我が国の国家、社会の祖形であり渡来人とともに伝わった稲作文化は日本全国を瑞穂の国に変え、遣隋使、遣唐使など九州の港から旅立った人々は大陸文化をもたらし、さらに時代は下って、西欧文明を取り込み、明治維新を成し遂げたのも九州をはじめ西国の人々であった。それらは、吉野ヶ里遺跡をはじめとする遺跡群、大航海時代の出島や教会群、日本を近代化に導いた産業遺構群など日本の歴史を物語る数々の遺産が九州に残っている。

2000年にわたる異文化交流、多様性を豊かに持つ九州文化そのものが、国際性、開放性先駆性を持つ、九州の伝統的な精神風土の形成につながって、大きな社会資産となっている。例えば、観光政策の基礎となる「もてなしの心」を育て、オープンマインドの気質を持つ九州人の特性につながっている。

## 幾つかの提案

1. 九州人の 100 年の夢であった九州国立博物館が開館、わずか 1 年半で 350 万人の来館者を記録した。東京、京都、奈良の国立博物館をはるかに越える未曾有の来館者であり、国民の歴史、文化への関心の深さを物語っている。九州国立博物館を中核とした九州内でのネットワーク（例えば、各県立博物館との巡回展覧会、職員研修など）の形成を進め文化拠点のみならず観光拠点化する。
2. 九州国立博物館は大陸文化が日本に伝えられた玄関口である九州・太宰府に建てられた。文明のクロスロード・九州の象徴でもある。いま、アジアの文化財は危機にある。例えば、戦火が収まらないアフガン・バーミアンの巨大石仏が爆破され、カンボジアなどの遺跡、遺構も荒廃している。九博は、文化財補修の学芸員、研究者を主力にしている。平山郁夫氏の提唱する文化の平和部隊の基地たりうる。アジアとの経済関係が日本・九州にとって死活的であればあるほど、文化的な連携は基盤強化として意識的に進めなければならないプロジェクトである。
3. 邪馬台国ブームが続いているが、その根拠となる魏志倭人伝に記載された国々が多く九州で確認され、遺構も数多い。現在、吉野ヶ里遺跡が国営公園化(明日香について二番目)年間 50 万人以上の来園者がある。これら大型の遺跡群を結ぶ歴史回廊を構築、遺跡の保存とともに観光・教育的な「活用」を積極的に検討すべきであろう。
4. 九州の交流文化は、長崎、博多、唐津、熊本などに魅力ある祭りや伝統文化となって息づいている。有田、唐津をはじめ「焼き物のふるさと九州」に根付く陶芸技術は、朝鮮出兵を機に日本につれてこられた陶工によってもたらされ、九州各地に個性ある陶磁器生産地として確固たる基盤を持っている。
5. 日本が西洋文化と出会う大航海時代にもたらされたキリスト教文化は過酷な弾圧を受けながらも、人々の心の支えとなり、長崎県・五島列島の教会群、島原、天草に残る隠れキリシタン遺跡など、いまや世界遺産的扱いを受け、ヨーロッパ、韓国からの観光客も多い。
6. 日本の近代の基礎を築いたのも九州である。明治維新の原動力となった薩摩、鍋島(佐賀)をはじめ、長崎の軍艦島、石炭採掘の三池、筑豊の炭鉱群、1901 に象徴される八幡製鉄、大陸との玄関口となった関門港など、近代化遺産群派はアジアの中でいち早く工業化をはかった近代日本の歴史そのものであり、貴重な歴史の証言者である。
7. さらに、九州に根付いている国際性、特に、アジアとの近接性という「九州資源」を活用した「新九州人」を育てるためには、アジア研究、アジア語の習得のための教育施設、留学生の一層の受け入れなどをはじめ、どのような施策が必要なのか。

## 九州が先行、先導する「新しい公」 地域おこしパワー

九州は地域おこしのメッカとも呼ばれる。湯布院、黒川温泉を例に上げるまでもなく、地域資源を生かし、地場産業と結びついた個性ある産品を生み出し、一村一品に象徴されるような住民自らが地域活性化の活動へと展開している。九州の地域づくりは、自らが暮らす地域への愛着、誇りを再発掘し、その土地の資源を生かした「地域づくり」運動であ

る。現在も活発な活動が展開されている湯布院、黒川温泉をはじめ、地域資源に磨きをかけ、手作りの観光地として全国区的な存在にまで、成長している地域は多く、九州の特徴となっている。九州の未来を作るのは「九州人のマンパワー」である。実際、地域資源の保全や継承のみならず、新たな文化の創造のエネルギーとなって成果を上げている。このパワーを今後、どう生かし、広げるか、「新しい公」の先導的な実践例となろう。

## 幾つかの提案

### 1. 道守九州会議の活動

3年前、九州各地で「道路」を美しくしようと、清掃、花壇づくり、植樹など様々な活動を続けている人々が、情報交換、交流しながら、活動を広めようという運動体。名付けて「道守」。「道守」は万葉集にも登場する。道の管理のみならず、沿道に実のなる木を植え、旅人の渴きを癒した、とも伝えられている。道守り九州会議はその現代版。現在、3万人を越える会員を持ち、年4回「道守通信」を発行している。

道を守る活動は、勿論、一般市民だけでなく、道路管理者も積極的に参加、支援している。行政と市民の新しい「協働」が作り出されている。高速道路をはじめ多くの社会資本が30年を超え、その維持管理がこれからの課題になるとき、住民の参加は欠かせない。しかし、行政側には、PIなど住民の「意見」参加はあっても「協働」のノウハウは乏しい。道路という社会資本の維持管理、さらには魅力向上の先導的試みとして「道守」活動に注目すべきであろう。

2. 大牟田方式として、全国的に知られている認知症をめぐる官民協働、地域ぐるみの取り組みは、これから、高齢化を迎える都市部の「新しい公」の実験として注目される。同市の「はやめ南人情ネットワーク」は向こう三軒両隣の見守りを通じて「認知症になっても大丈夫」の街作りを進めている。
3. かつて、消防団など地域経営の担い手の主役を演じた地縁型組織は、人口減と高齢化のなかで揺らいでいる。地域の安全安心を確保するためにも、再編、再構築に行政が積極的に関与することが、必要になっている。
4. 地域コミュニティが求心力を取り戻すには、博多山笠はじめ長崎、熊本各地に伝統的な祭りや高千穂の神楽など伝統芸能が多い。地域の歴史、伝統、文化の継承が九州の、またその地域の誇りとなり、九州らしさを演出する。しかし、多くの祭り、伝統的な行事は人口、若者減、村落維持の危機の中で存続を危ぶまれるだけに、対応が必要だろう。

このように、「自然」・「歴史」と「九州人」が織り成す「文化パワー」をどのように計画形成に織り込み、位置づけ、社会資本づくりに具体的に生かすかが重要になる。多様な動植物を持つ九州の自然をどう守り、遺跡をどのように保存し、活用するのか。祭り、伝統芸能、伝統工芸を活性化するには、何が必要か。国土形成計画の作成に当たって、九州島というブロック圏域の空間性を意識するとき、そこに暮らす人々が、何より、九州人としてのアイデンティティを持つ一方で、古くは9つの州、現在は7つの県に分かれ、それぞれの地域に愛着と誇り、独自の文化を育んできた。この九州圏広域地方計画が、「九州はひ

とつひとつ」の意識を超え、「九州人」としての新たな連帯感をつくり、意識を共有し、共感を覚え得るオリジナルな計画かどうか、この計画を現実のものとする鍵であろう。

その中で、国土交通省が中心になって進めている「日本風景街道」プロジェクトは、九州の自然、文化、さらに「新しい公」を構成要素としており、九州らしさ作り出すものとして注目してよい。

現在、九州では8ルートがモデルルートとして申請されており、九州風景街道協議会(委員長 明石・西鉄会長)が結成され、北海道とならんで、全国のトップランナーになる条件を備えている。

参考 玄界灘風景街道  
阿蘇くじゅうやまなみ風景街道  
長崎サンセットロード  
日南海岸きらめきライン  
錦江湾あつたまるーと  
蒲江・北浦大漁海道  
唐津街道・原町  
北九州ゆっくりかいどう